



■教育長リレーエッセイ

町村合併と教育委員会の役割……………南アルプス市教育委員会教育長 野沢 達也 1

特集 ■ 「敬語の指針」文化審議会答申について

■寄稿

自己責任と小説の中の敬語……………前文化審議会会長（国語分科会長） 小説家 阿刀田 高 2
 ドラマの方言指導の現場から
 ……………前文化審議会国語分科会委員 ドラマの方言指導 大原 稔子 5
 「敬語の指針」と学校における敬語指導……………東京都目黒区立第八中学校長 松村 由紀子 8

■論文

「敬語の指針」で留意すべき点……………独立行政法人国立国語研究所所長 杉戸 清樹 10
 「敬語の指針」第3章「敬語の具体的な使い方」について……………早稲田大学教授 蒲谷 宏 14
 日本語教育に生かす答申「敬語の指針」
 ……………東京女子大学現代文化学部言語文化学科教授 西原 鈴子 18

■解説

文化審議会答申「敬語の指針」の紹介……………文化庁文化部国語課 22
 敬語の具体的な使い方……………文化庁文化部国語課 25

■資料

「敬語の指針」文化審議会答申の概要……………文化庁文化部国語課 28

■調査・統計

学校評価及び情報提供の実施状況調査結果の概要（平成17年度間 調査結果）
 ……………初等中等教育企画課学校評価室 30
 学校評議員制度等及び学校運営協議会設置状況調査結果の概要（平成18年8月1日現在 調査結果）
 ……………初等中等教育企画課学校評価室 60

■資料

教員免許状の授与状況（1）……………教職員課 69

■新シリーズ 学校安全

携帯電話の持つ危険性と今後の課題について……………警察庁生活安全局少年課長 山口 敏 81

■シリーズ 海外教育最前線

ハンガリー共和国の初等中等教育における言語教育
 ……………文化庁文化部国語課日本語教育専門職 中野 敦 88

■お知らせ

第31回全国高等学校総合文化祭 悠久の地より吹く新しい風－島根2007－……………92
 第20回全国スポーツ・レクリエーション祭 スポレクあおもり2007……………94
 宇宙教育シンポジウムの開催について……………96

ドラマの方言指導の現場から



前文化審議会国語分科会委員
ドラマの方言指導
大原 穰子

「文化審議会国語分科会、臨時委員を委嘱します」と言う依頼書を受けたとき、何時もいろいろご指導いただいている方言学の先生にお電話をしました。

「今度、文化庁の国語分科会の臨時委員にと言うことでお受けすることにしましたが、私でも務まるのでしょうか」と、すると先生は「え!!それは大変なことですよ、言語学の先生方もその会に出ることは、大変誇りに思われているのですよ、頑張りなさい」と励ましてくださいました。

そこで自分で望んでもこのようなことは二度と得られない機会なのだからと、高飛びのバーを一挙に10センチも上げた意気込みで参加させていただきました。

私は敬語について、特別に学んだ覚えはありませんが、言葉遣いとしては、小さい頃から家庭でかなり厳しく躾けられてきました。社会に出てからは、目上の人、自分が尊敬している方たちに対しては、特に意識しなくても、態度や、言葉遣いでごく自然に振舞い、特に「敬語」をあれこれと選択して使うということはありませんでした。

ところが、今回の審議会課題は、「『敬語』を使いたいけれど、どのような時に、どのようなことば遣いをして話せばよいのか、と困っている人々に、適切なことばとして指し示していくことを審議する」ということでしたから、敬語をはじめドラマのことばを「人物形象」を重視した視点からだけで考えてきた私にとっては、専門家の先生方の多角的で深い内容での審議に参加することは、とても有意義なことでした。

そこで私が現在行っているドラマの「方言指導」という仕事を簡単にご紹介します。

舞台・映画・テレビ等のスタッフとして参加する時は、最初に製作者側から手渡された台本を読みます。作品の舞台となるところが、仮に大阪だとしますと、そこに登場する人物の話す

ことば・「台詞」は、基本的に大阪弁と言うことでなくてはなりません。

そのために、台本に書かれてある時代、地域、いろいろな登場人物の生活している環境、それぞれの人物の年代、心情、性格、思想などを読み取ります。

その場合、特に、登場人物について、例えばA、B、C、Dと4人の登場人物が設定されている場合、各場面ごとの登場人物のことば(台詞)、行動、態度などを通して、点と点、点から線、線から平面へと結んでいき、それぞれの相関関係に、作家の意図するテーマがどのように織り成され書かれているのかということを、いろいろな角度から読み解いていきます。

その中で^{おの}自ずと各人物の「立つ位置」や、役割によって「ことば遣い」も決まってきます。しかし、作品の台詞が、すべて方言で書かれているとは限りません。作品によっては共通語で書かれていたり、部分的に方言で書かれていることもあります。

そこで共通語で書かれている場合は、「方言」に直して、いったん作家、演出家に戻し、作品意図を「表現の視点」で確認していただきます。その結果、「これでいこう」ということになれば次の作業の「方言テープ」作成にかかります。

方言テープは、登場人物それぞれの役の台詞を「音声化したことば(方言)」として吹き込み、それぞれの役柄を演じる俳優さんに手渡し、俳優さんたちの役作りの一助として使われます。

舞台の場合ですと次は、^{ひら}稽古場に演出家、スタッフ、俳優が集まり、1か月から2か月の稽古に入ります。稽古は基本的には作品の最初の場面から順次、稽古を積み重ねていきます。その過程で作品は登場人物が一人ずつ立ち上がり、「活字の世界」から生きた人間像が動きだして、そのドラマ固有の世界が繰り広げられていきます。

しかし、映画やテレビドラマの撮影の場合は、最初からラストまでを順番に撮影していくのではなく、撮影現場の条件や撮影に必要なさまざまな条件によって、各場面を構成するカットを順不同に細切れに撮影していきます。ですからカメラの前に立つ俳優さんたちは、「ドラマ全体の流れ」の中での「どの場面の演技」を撮影するのか、カット毎に役の人物の心情や考えや行動の変化について、判断し、演じることが求められます。したがって方言指導者もまた、同じようにそのカットの役割を理解することが基本となりますが、一方、俳優さんの演技を見て、俳優さん自身が演じようとしているイメージを、把握し、台詞の方言を通して、その演技の手助けが出来るようにアドバイスする、それも方言指導の仕事です。

いずれの場合にしろ、方言指導は作品を読む力、そして作家、演出家の意図を汲み取り、それぞれの俳優の演じる登場人物が生き活きと舞台の世界で生きていくために「方言」の台詞を通してお手伝いしていくのが役割です。

こうした仕事柄から、実生活の場面でもことばと、ことばを使っている人の心情や個性など

に関心ももたれます。

例えば先日、こんなことがありました。

ある日、バスの中に赤ちゃんを抱いた若いお母さんが乗ってきて、ためらうことなく優先席(シルバーシート)に座りました。続いて荷物を手にした夫らしい青年が、その横にドシンと腰を下ろしました。次の停留所で年配の女性が乗ってこられた時、青年は座ったままで「座りますか?」と、声をかけました。するとその女性は「いいえ大丈夫です」と言って奥の方へ進まれました。

また、次の停留所についた時、今度は白髪の男性が乗ってこられたので、青年は同じように「座りますか?」と声をかけました。お爺さんは「いや、結構です」とそのまま立っておられました。

そうしたやり取りを見ていた私は、(…この青年、本人が座っていることが、後ろめたいのかしら、もし本当に席を譲らなくてはと思っているのならどうして、立ち上って「どうぞ…」とか、「お座りになりませんか…」と言わないのだろうか? そうすれば老人は素直に腰をおろしたかもしれない。…もしかしたら、青年はその気持ちをことばや態度でどう表現すればよいのか判らないのでは…)と考えたりしました。

敬語に限らずことばは、基本的には語彙だけでなく、相手の人への心が、言葉遣いや、態度、行動によって表現されるものだとおもいます。

ドラマにはさまざまな時代が登場します。

私が生まれ育った「昭和」の時代は、今や、時代劇として扱われています。

社会が変わり、人々の生活形態も変わる中で、ことばも変化し、中にはその意味すらも変わってきているものもあります。

ドラマは社会を映す鏡とも言われます。「国語分科会」「敬語小委員会」で諸先生方との審議に参加させていただき、ドラマで使われる「敬語」は、「時代」と「自己表現」の貴重な文化であることを改めて強く感じました。この2年間、私にとっては何ものにも変えがたい宝の時間でした。

